

わたしにとどまりなさい

(ヨハネ15・1〜11)

一、ぶどうの木のとえ

農夫がぶどうの木を植え、おいしい実がみのるなら、説明されるまでもなく、「うれしい。神の祝福だ」となるでありません。しかし、酸っぱい実であったり、実が痩せていたり、あるいはみずからなかつたならどうでしょうか。「どうしてなのだろうか。おいしいぶどうが成るはずだったのに、酸っぱい実がなってしまった」とがっかりし、あるいは嘆くことではありません。

ぶどうの木のとえは旧約聖書においても、預言者たちの口によって語られました(→イザヤ5・1〜2)。その箇所では、ぶどうの木がイスラエルになぞらえられています。主イエスが語られたぶどうの木のとえは少し異なります。(→15・1わたしはまことのぶどうの木であり、わたしの父は農夫です。)と、主は語られました。このたとえに、イエスの弟子たちは、何が語られているか、すぐに分かったと思われま

二、たとえを聞いた人々

ですが、よく考えてみられてください。主イエスが語られたたとえ話を、ヨハネの福音書から聞いているのは、か

つての十二人の弟子たちではありません。その出来事から60年以上経過した、ヨハネが属する教会の信徒です。事実、ヨハネの福音書には、ユダヤ人の文化が分からないために読者に解説していることが現れます(→ヨハネ1・38、1・41他)。ヨハネが属する会衆は「ラビ」と言われても何のことか分からない、「メシア」と言われても何のことか良く分からない人たちが多かったようです。そういう人たちが、かつて語られた主イエスの言葉を、今現在語っておられる主イエス・キリストの言葉として聞いている。これが、ヨハネの福音書の背景です。では、ヨハネが属した教会の人たちは、ぶどうの木のとえに何を思ったのでしょうか。何を教えられたのでしょうか。

三、教会生活の喜び

教会生活、すなわち主イエスを信じて教会に連なる生活の特徴は何だと思われま

す。と。主イエスを信じるとは、主イエスの内にとどまることです。それによつて、主イエスの言葉が、すなわち御言葉が、信じる一人ひとりの内に留まります。結果、喜びが生まれます。これが信仰生活であり、教会生活です。

四、主イエスにとどまる

では、どうしたら喜びに満たされる人になるのでしょうか。それは、主イエス・キリストというぶどうの木につながり、とどまることです。4節をご覧ください。(→わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。) 主イエスにとどまるとはどういうことでしょうか。それは、何があつても主イエス・キリストの内に自分を置くことです。そうすれば、何かの問題が起こり、つらい思いをしても、「自分にも問題があつたかもしれない。神はこのことをとおして私を整えておられる」と思えるようになります。まさしく、農夫である神が、ぶどうの木である主イエスにつながっている私たちを刈り込んで

います。と語られています。

五、「わたしにとどまりなさい」

では、主イエスにとどまるとは何なのか、もう一歩踏み込んでみましょう。それは、「教会に留まりなさい。教会生活に留まりなさい」という意味です。「教会は人間関係のトラブルが多いからいやです。私は神と一対一で交わるのが好きです。ならば、自分の家でもかまいません。一人で礼拝をささげます」で良いのでしょうか。良くありません。ヨハネの福音書1章14節をご覧ください。(→ことばは人となつて、私たちの間に住まわれた。)とあります。(→ことばとは、人として生まれられる前のキリストです。(→私たちの間に住まわれた)の(→私たち)は教会です。と言いますのは、(→住まわれた)の元の言葉(「スケノー」は「天幕に宿る」の意味だからです。かつて、主なる神はエジプトを脱出したイスラエルの中に住まわれるに当たり、モーセに幕屋を造るように命じられました。あの、荒野における幕屋こそ、神が仮の宿とされた住まいでした。教会も同じです。もちろん建物のことではありません。主イエス・キリストを信じる群です。そこには問題も起こります。ですが、ことばなるキリストは人間となり、教会を仮住まいとされたのです。ならば、「わたしにとどまりなさい」は、「教会にとどまりなさい」の意味です。